

The Asahi Shimbun GLOBE

globe.asahi.com

GLOBEサイトに関連情報をお読みください。

Break-through

藤倉 大

Dai Fujikura 作曲家

文 石合 力 Tsutomu Ishii / GLOBE副編集長

写真 大橋 仁 Jin Ohashi

心地よい
不協和音求めて
完全に計算された
世界を作りたい



今

年5月、活動拠点のロンドンから一時帰国した作曲家藤倉大(32)は、ラッシュ時の東京駅にいた。山手線と京浜東北線が同じ方向に走る5、6番線。出発を知らせる電子音が重なると、騒々しい不協和音が通勤客を包み込んだ。

「不快な騒音そのもの。頭の中にこびりついてしまう」

日本人作曲家の管弦楽作品の優秀作に贈られる尾高賞を今年受賞し、世界各地の音楽祭やオーケストラから作曲の依頼が相次ぐ。そんな若手作曲家のトップランナーが東京駅に来たのは、欧州の鉄道ではないホームの騒音を音楽的に解決する方法を探ってみたかったからだ。

藤倉はいう。ホームのような偶発的(アクシデンタル)な騒音と、計算された「不協和音」は違う。と。不協和音は、時代とともに進化するのだ。「いま、ピカソの絵をだれもおかしいといわない」と同じ。癒やし系のラヴェルやドビュッシーの曲も当時は不協和音だった

自分の求める新しい音は、いま耳障りに聞こえても、未来の聴衆には心地よく響くはずだと確信する。

ロンドン郊外にある自宅は、築200年以上の民家を改造したアパート。ブルガリア人で元チェロ奏者の妻ミレナが、勤務先の幼稚園に出てから、夕方に帰るまでの間が仕事の時間だ。「作曲は時間の投資」と割り切り、大曲から小品まで、同時に並んで書く。「締め切りを守る唯一の作曲家」を自称するが、出だしを書き始めるまで1か月くらいかかることもある。「その間、テレビコメディーのDVDをぱーっと見ている」

打開策は20分活用法。ロンドンの地下鉄、バスをゆる間、風呂を入れる間の細切れの時間に書く。いったん集中すると、周りの音が聞こえなくなる。バスは伸び、風呂はあふれる。

曲は手書きしたものをコンピューターに打ち込み、印刷したものを持ち歩き、書き足す。手書きだと一見、オリジナリティーにあふれているように見える「譜面」を客観的に見る手段でもある。

万博記念公園に近い大阪・千里丘。藤倉は駅近くのマンションで中学卒業まで過ごした。父勝弘は看護教育で全国を回るが、家に戻るとまずピアノに向かう音楽好き。大学時代、ピアノバーで学費を稼ぎ、音楽学校にも通った。母光子もピアノを弾く。藤倉は、5歳でピアノを始めたころから絶対音感があり、どんな物音も「重なった音符」で示すことができた。小1のとき、両親にねだった。「グランドピアノを買ってほしい」音とタッチが違うから

相愛の大の子ども用英才教育などで力を伸ばしたが、時に型にはめられるのをいやがり、反発することもあった。

「自分の曲なら、自分の好きなように演奏できる。作曲家になろう」

そう本格的に思ったのは中1の頃だ。得意な3科目だけで大学に入れると知り、英国を目指した。「その分、音楽に時間を使えるから」

父親は「留学は大学を出でから」と思っていたが、本人の意思は固かった。英国のサマースクールで英語を学び、中3の夏、音楽教育に力を入れる英ドーバー・カレッジ(寄宿学校)で自作とベートーベンのソナタを弾き、合格した。「英国でも、僕くらい真剣に音楽家になろうと思っていた生徒はいなかった」と振り返る。

学生時代から国際的な作曲コンクールで優勝し、注目されたが、作曲だけで食べていくのは難しい。親の仕送りに加え、近所の子どもにピアノを教えながら、作曲を続けた。

転機は03年、26歳の夏に訪れた。スイス・ルツェルン。現代音楽の大作家ピエール・ブーレーズが直接指導する若手作曲家を選ぶオーディションに、98年の作品と、その4年後に書いた作品の2点を提出した。

self-rating sheet

自己評価シート

自分にどんな「力」が備わっているのか。何が強みなのか。編集部が選んだ10種類の力を提示したところ、ランク付けより、○△△を希望した。

集中力 → ○

独創性 → ○

企画・交渉力 → ○

締め切りを守る力 → ○

分析力 → ○

運 → ○

語学力 → ○

体力 → △

持続力 → △

協調性 → △

て1年飛び級に。音大の学費は、誘いのあった2校を競わせ、学費無料で志望校に入った。卒業制作の自作オペラを学外で公演したうえで、採点担当の教員にもチケットを貰わせた。運は○とした。あこがれのブーレーズに会うきっかけとなったのは、英国でのプロジェクトで知り合った作曲家兼指揮者エトヴェッシュの紹介。藤倉の楽譜とCDを聴き、本人に会う前から、欧州の音楽関係者に推薦した。

協調性を△としたのは、作曲の時間を確保するため、パーティーや結婚式に出ないと決めているから。本当に必要なら、個人的に会う。洋服もユニクロでまとめて買いたい。「ネクタイみたいに着ける意味のないものは着けない」■

ふじくら・だい
1977年、大阪生まれ。

5歳でピアノを始める。

15歳で単身、渡英。作曲家ジョージ・ベンジャミンらに師事。98年、ボーランドのセロツキ国際作曲コンクール優勝。03年、英武蔵微作曲賞2位。04年、英ロイヤル・フィルハーモニック作曲賞。06年、英BBCプロムスに初登場。09年、ピアノ協奏曲(独奏・小川典子)をロンドンで初演。尾高賞を受賞。

尾高賞を受賞。

面接でブーレーズは言った。「最初の作品はアンプロフェッショナル(未熟)だが、もう一つはいい」。4年でこれだけ変わられるなら、今からどれだけ変わると興味がある」

藤倉が当時から自らに課していたのは、テーマでも作曲技法でも、過去に使った技法をあえて使わず、新しい領域に取り組むことだ。意識するのは、作曲家ストラビン斯基の言葉だ。「行動にしばりをかけた方が、私にとっての自由はより大きく、意味あるものになる」

ブーレーズに見いだされ、活動の場は、英国から欧州大陸、世界へと広がった。作曲だけ生活できるようになつたのはこの年からだ。来年初めには、ブーレーズ85歳を祝う作品を米シカゴ交響楽団が初演する。

東京駅を訪ねた数日後、藤倉の作品がNHK交響楽団の演奏会で取り上げられた。尾高賞受賞作品「シークレット・フォレスト(secret forest for ensemble)」。壇上に並んだ9人の弦楽合奏と、客席の四隅や中央に配置された木管、金管奏者8人がともに演奏する。映画の効果音に使う筒状のレインスピックの雨音と響き合い、森の中にいるような幻想的な空間がホールに広がった。

この曲で、藤倉はある実験をした。木管、金管奏者には、複数の楽譜があり、奏者がどれを演奏しても弦楽奏者との「計算されたハーモニー」が成り立つ。「未来の」東京駅ホームのように――。

藤倉は、作曲という作業を黒澤明の映画になぞらえる。エキストラ一人ひとりの動きまで完全に計算された「隠し岩の三悪人」のワンシーン



これは、今から照明をずっと点けていたとしたら、寿命が来てしまう日。大和ハウスのLED照明システム「grace lumino(グレース ルミノ)」は、超長寿命設計で約10万時間の耐久性を実現しました。そして消費電力・CO2排出量も蛍光灯に比べて最大53%カットします。

LED照明——これも大和ハウスなんだ。

DaiwaHouse
大和ハウスグループ

*1_設計期待寿命を示します。保証期間は2年となります。*2_星光利用による調光システムを併用した場合です。

The Asahi Shimbun GLOBE

[朝日新聞グローブ] 2009年7月27日(月)第20号

編集:

朝日新聞グローブ

編集チーム

郵便番号104-8011

東京都中央区築地5-3-2

電子メール globe@asahi.com

アートディレクション&デザイン:

木村裕治

デザイン:木村アサヒ・事務所

原藤邦介、後藤洋介

エンターテイメント:

枝常陽子

制作:

朝日アドテック

■

月2回、月曜日発行

■

抜き出してお読みください

■

次号は

8月3日(月)発行を予定しています